



協力お願い

目の中にがんができる難病、網膜芽細胞腫(もうまくがさいぼうしゅ)の治療のためユーゴスラビア・コソボ自治州から来日し、金沢大学医学部付属病院に入院中のアルバニア系男児、ネジール・シニツクちゃん(三才)の写真に九日、産経新聞社の「明美ちゃん基金」の適用が決まった。重い心臓病や難病の子供を支援する同基金から、治療費や滞在費として五百万円を支給する。

つぶらな瞳に愛を

ひとのハートはあったかい



明美ちゃん基金

ネジールちゃんは今年一月に網膜芽細胞腫にかかっていることが分かり、三月に右目の摘出手術を受けて義眼となった。

その後、治療のため首都ベオグラードの病院に入院する予定だったが、北大西洋条約機構(NATO)軍の空爆でコソボとベオグラードとの往来ができなくな

った。

空爆終了後、緊急医療活動のためコソボ入りした日本の非政府組織(NGO)、AMDA(アジア医師連絡協議会)の医師がネジールちゃんを診察し、がんの再発を防ぐには早急な治療が必要と判断。コソボには専門医がなく、日本アルバニア協会を通じて国外での治療の受け入れ先を探し、金

ネジールちゃんは入院三日目の九日、徐々に緊張も和らぎ、院内を散歩するなど落ち着いた様子で、眼科診察、胸部X線、心電図検査などを受けた。

日本アルバニア協会によると、ネジールちゃんは食事を持ちこんと食べ、差し入れのジュースを飲むなど食欲もあり、大きな笑い声をあげながら病室内を歩いたり、おもちゃで遊んだりしているという。

十四日から本格治療に入る予定だが、協会やAMDAが中心になって「ネジール君を支える会」を結成、支援活動を行っている。

【明美ちゃん基金】

昭ボツアやロシア、ペルー和四十一年、先天性心臓病で苦しみながら貧しさのため手術が受けられない少女、伊瀬知明美ちゃんのことを伝える産経新聞の記事がきっかけで設立。読者の義援金でカン

ポツアやロシア、ペルーなどの百人以上の幼い命を救ってきた。昨年十一月、基金の適用範囲を医療・衛生基盤が未整備な途上国で難病に苦しむ子供たちへの医療活動にも拡大した。